

神示を受くる迄へ上へ 転身

六

ある冬の朝、わたしが一週間の断食を終わって食堂へいったとき、そこには大きな一斗釜に温かい諸粥いもがゆが炊かれてあった。そこは地方から出て来て、神様の御用に全身を献げている全然無欲な奉仕の人たちが食事をする食堂であった。杓子しゃもじが二つしかなかったので、自分の順番が来るまで待っていた。その間に見ていると、皆の者は争うようにして、粥かゆの中の薩摩さつまいも諸を扱よってはわれがちに自分の茶碗の中へよそうてゆくのであった。そしてわたしの順番の廻ってきたときにはもう薩摩諸は一片もないようになつていたのであった。その有様を見ていることはあさましかった。そしてそれをあさましいと感ずるわたし自身もあさましかった。世の中が神力によつて大改造され、いっさいの悪人が焼き滅ぼされる時期がここ数年間に迫っていると信じ、その日のために身も心も浄めようとして神務に奉仕している人たちが、釜の中の薩摩諸の一片を争おうとしているのだった。

しかしそれが人間だったのだ。人間の現実はかくのごとくあさましいものだったのだ。どんなに最後の審判の日を眼の前に差しつけられて、改心しないと焼き滅ぼす

ぞと威脅おどされても善くなれないのが人間ではなからうか。わたしはますます憂鬱ゆううつになり、淋しくなり、悲しくなり、神を信じていてわたしは喜べるどころか、いっそう悩ましくなるのであった。

十八

こう天香氏が話していられるうちに皮肉な現象が起こつていた。

というのは、庭にはほとんど不要な草が生えていなかったということであつた。なぜならわたしたちみずから榎軒氏の宅を預り毎日綺麗に草取りしていたからであつた。特にそこに生えている草といつては、景色に風情を添えるものとしてわたしたちがわたしたちの趣味から抜かずにおいてあるもののみであつた。天香氏のお弟子たちは、奉仕労働を献ささげるといふ意味で、わたしたちが趣味から抜かずにおいてある草を平気で抜き取りつつあるのであつた。それを見ると妻は周章あわてて起たつていった。「その草はわざと抜かずにおいてあるんですから、抜かすにおいてちようだい。」

一燈園の同人たちは妻のその言葉を遠慮してわざとそう言うのだと思ひ違ひしながら、「ええ、ええ」といい加減な返事をしながら、依然として四辺あたりの草を抜いていった。そして最後に、跣足はだしになつていたその泥足を、井戸の水を汲んで洗つた。やがてその一人は便所へいって便

所を拭き始めた。真夏の早魃で水が少なくなっていたその井戸は、釣瓶が支えて、水を汲むたびごとに、底に溜っていた水垢が表面に浮かび上がった。たちまち井戸の水全部は、鉄鑄のようなムラムラが一杯に混濁して、拭き掃除にも飲料にも使えないものになった。そして托鉢の同人が足を洗って座敷へ上がって来た時には、せっかく奉仕の同人に捧げたい気持ちで出してあった氷イチゴが半ば以上融けてしまっていた。

わたしはこうした矛盾がどうして起こるものであろうかということを考えずにはいられなかった。一燈園は「無私の奉仕」を生活のモットーにしているにもかかわらず、かくのごとき矛盾の事態が発生するのは、無我と下座とを混同したところにあるということわたしは明らかに見抜いたのであった。下座も下座に捉えられれば明らかに我執であるということわたしは知ったのであった。なんでもかでも、庭の草は抜かねばならぬと力むとき、抜いてはならぬ草を抜くようになるのである。なんでもかでも、水を汲んで掃除をしなければならぬと力むとき、汲んではならない水を汲み、水を掻き擾してかえって悪い事態を引き起こすのである。そして本人は「托鉢をした、奉仕をした」と思って、思い上がった高慢な気持ちになってはいないだろうか。

わたしたちにとつては、草も抜いて欲しくなかったし、便所も掃除して欲しくなかったし、水も汲んで欲しくなかったのである。わたしは頼まれもせぬのに他人の便所をみだりに他の人が掃除することを決して善だと思えな

かった。それは濫りに人の隠所を引き開けて掃除するにも似た不作法さであるのである。本人が病み衰えて、自分の隠所の処理すらできないほどに重体の患者が、みずから進んで頼む場合は別として、普通の人は自分のことを自分で処理する習慣をつけるべきではなからうか。自分の嫌なところはすべて一燈園の同人が来てやってくれるということになったならば、人類の依頼心を増長させ、狡い奴が一燈園を利用することになり、かえって人生が歪んだものとならないであらうか。しかしわたしは天香氏に悪意は持てなかった。かくのごとき不結果を得たのは天香氏自身の罪というよりも、托鉢という形に捉われすぎたその同人の誤であったであらう。こんなわけで、皇道大本も一燈園もわたしの生活理想を完全には満足せしめることはできなかった。

生命の實相 谷口雅春 日本教分社